

天地

ネットワーク テーブル 495号

天地シニアネットワーク 201

9. 6. 16

T E N T I T O D A Y		1
会員の広場		2
歴 史	米国の統治の仕組みと大統領制、と建国の父たち(8) その4: <u>第4代大統領 ジェームズ・マディソン</u>	佐川 雄一 2
論 考	中国人から見た日本人の言語表現心理(3) <相手と和を保つ>	兪 彭 年 4
論 考	満州を考える(4)	加藤 幹雄 6
旅行記	「静聴雨読庵より」(7) ホー・チ・ミン市でシベリウスを聴く	尾関 陽四 8
回 顧	海外での思い出(2) アテネ(2)	森永 善彦 1 2
論 考	160年前の日本社会に驚愕・感心・感動した欧米人 その2. 喜望峰以東でもっとも優れた民族	臺 一郎 1 3
講演会	「奈良興福寺文化講座」「新三木会」	1 4
事務局		1 5

T E N T I T O D A Y

日曜日、浅草仲見世に近い喫茶店に入ると「国民年金だけ、税金とか決まった経費が月に5万もあるので、1万5千円で生活しているらしい。ガスは基本料金があるので、風呂は使わず、週に一度風呂屋に行って外出はなるべく控え、家で動かないようにしているらしい」。高齢男女4人が身内の心配をしている様子でした。

戦後の悲惨な状況下で我慢を経験している世代なので、大人しくしているのかもしれませんが。しかし、中・高年者の正規雇用は進まず、非正規労働者も増えつづけ、今後、我慢を知らない世代がどんどん増える。

「自己努力で・・・」という国のスタンス、資産形成など夢の夢、将来を安心して迎えることのできる日本人は、半分もいないのではないのでしょうか。

ヴァイオリンの前橋汀子演奏会がサントリーホールでありました。70歳を越えて、聴衆を大事にするサービス精神にいつも感心するのですが、今回もアンコール曲の最後を、バックシートの聴衆に向きあってもう一度弾きました。「気配り」や「思いやり」が最近お目にかかることが少なくなりましたので、心に強く残ります。

大学のクラブ、久しぶりに母校の高校から新生が入り、自己紹介をして、「10期卒業なんだけれど、君は何期？」と聞くと「73期生です」という返事、互いにしばし呆然、笑ってしまいました。63歳の年齢差、説明のしようがありません。有望な選手のようなので、楽しみが増えました。せっせと応援に行こうと思っています。

彼のこともあって、高校のクラブ総会に出してみました。顧問の先生が挨拶というより悲鳴を上げていましたが、高校一年の新入部員が1名しかいない。こんなこと初めて、スポーツ離れが著しいとの説明でしたが、スマホ時代、高校も大学も学校スポーツは今までと同じには行かなくなったようです。

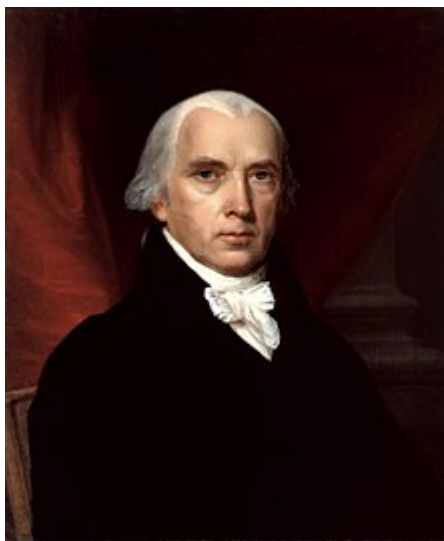
会員の広場

米国の統治の仕組みと大統領制、と建国の父たち（8）

佐川雄一

2. 建国の父たち（4）

2-4. 第4代大統領 ジェームズ・マディソン



ジェームズ・マディソンは、1751年3月16日ヴァージニアの農園貴族と呼ばれる富裕層の家庭に10人兄弟の長男として生まれた。ジェームズ・マディソンは、幼少時、母親と家庭教師、そして近くの学校で教育を受ける。身体が弱く、病気がちであったものの、頭脳明晰の少年であった。1771年、ニュージャージー大学（後のプリンストン）に入学、法律を学ぶ、卒業後、大学院で神学を学んだ。ヴァージニアに戻ると、英国政府が課した諸々の物品課税に住民が憤っている姿を見て、熱烈な愛国者になっていく。兵役を目指すが、脆弱な体質で拒否される。

1787年、憲法制定会議の代議員になる。憲法制定会議では、[ジェームズ・マディソン](#)と[アレクサンダー・ハミルトン](#)が「連合規約」（1781年、アメリカ合衆国の建国直後、制定された憲法）の欠陥を指摘、中央集権的な憲法の制定を主張、長い議論の末、最後は大勢をリードし、[アメリカ合衆国憲法](#)の起草に着手した。マディソン 36歳、ハミルトン 29歳であった。

憲法制定から2年後に、「人民の自由の権利」を保障する「権利の章典」を修正第1条 - 第10条で確定するが、これもマディソンの尽力によるどころ大であった。

1794年、43歳の時、16歳年下のドリーと結婚するが子供運には恵まれな

かった。第3代大統領：トーマス・ジェファースンの内閣で8年間、国務長官（1801 - 09）の任に就き、ジェファースンの退任後、第4代大統領（1809 - 17）に就任する。

大統領在職中、欧州大陸でフランスと戦う英国が、合衆国に対し、フランスとの通商を規制する動きに出るが、英米の交渉が行きづまり、再び米英戦争（1812 - 15年）が起こった。

ワシントン特別区が一時、英国軍に占領されたが、合衆国の権益を失うことはなかった。

マディソンはジェファースンの路線を忠実に引き継ぐが、外交問題（英仏戦争の余波を受けて）に多くの時間を費やすことになる。

マディソンの経歴を見ると、トーマス・ジェファースンと同じく、州政府・大陸会議・中央政府の閣僚経験を重ねた上で、大統領選に出馬する用意周到な準備が伺える。

1751年	ヴァージニアで誕生
1776年	ヴァージニア州憲法制定委員会委員（25歳で起草に携わる）
1780 - 83年	大陸会議メンバー
1784 - 86年	ヴァージニア州議員
1786 - 88年	大陸会議メンバー
1787年	合衆国憲法制定委員会委員（36歳で憲法の起草に携わる）
1789 - 97年	連邦議会下院議員（憲法修正による「権利の章典」の確定に深く係る）
1794年	妻 16歳年下のドリーと結婚
1801 - 09年	国務長官（妻 ドリーはファーストレディとしてジェファースン大統領を補佐する）
1809 - 17年	大統領
1826 - 36年	ヴァージニア大学学長（創立者；トーマス・ジェファースン）
1836年6月28日、逝去、享年85歳。	

マディソンは、1787年、合衆国憲法の署名に加わった後、新憲法の批准に反対する地元ヴァージニア州の代議員説得にエネルギーを動いた。しかし、彼は病弱体質であった上に、スピーチに難があり、さらに身長も歴代大統領の中で一番低いというハンディもあり、(The smallest man ever to become President) 政界の活動は多くの困難が伴ったと考えられるが、常に、合衆国の国益を念頭に入れて行動した。建国期の米国には、マディソンのような憂国の士が多く見られる。

(つづく)

中国人から見た

日本人の言語表現心理（3）

俞彭年

相手と和を保つ

日本人が気を遣うのは相手との和を保つためだという。自分の振る舞いや言葉遣いなどが相手との和を損ないはしないか、相手との和を保てるかと気を遣うらしい。日本には「和をもって尊し」という言葉がある。互いに気が合うように、仲良くするように、争わないようにするために日本人はいろいろと工夫をする。この工夫が中国人にとって難しいのだ。というのは、中国人も人との和を図るために工夫をするが、それは日本人ほどきめ細かくはない。

日本人のこの面での工夫で先ず挙げられるのは挨拶だ。中国人は日本人の各種各様な挨拶とその微妙な心理に戸惑い、そして煩わしく思っ閉口する。しかし、挨拶は日本人のコミュニケーションではたいへん大事なものであり、相手との和を保つ潤滑油だと言われている。人に会ったり分けられたりするときに取り交わす儀礼的な挨拶、儀式や会合などで祝意・謝意・親愛の意を述べる挨拶、就任・辞任・離任・転任・転勤・退職などについての挨拶、応対・返事などについての挨拶などなど、日本の挨拶は実に多種多様で、それにそれぞれのしきたりがあって、それらを守らないと、挨拶をしないと挨拶ができないとか挨拶が下手だといわれて、相手との和に悪い影響をもたらす。したがって挨拶は社会的な規範であり、人々はこの規範を守って適時、適宜の挨拶をするように仕組まれている。

挨拶を重んじることは礼儀を重んじることの現われだが、面白いことに、日本と同じように礼儀を重んじる国である中国の言葉に日本語のこの挨拶という言葉に当たる言葉がない。したがって、日本語の「挨拶」という言葉を訳すときは使われたときに具体的に何を指すかで訳語が違ってくる。つまり、中国人には日本人のような挨拶という概念がないのだ。

日本人が挨拶としてとらえる個々の事柄はもちろん中国にもある。例えば、知った人に会ったときには「你好」とかお天気などについてちょっと話し合うとかがあり、知った人と別れるときには「再见」とか「请慢走」とか「下次再来」とかの言葉を発する。これは「打招呼」とか「应酬活」と言う。

それから会合などで祝意や謝意などを述べることはもちろん中国でもある。しかし、これは「祝賀」とか「致謝」と言われる。日本での就任・離任・転勤・退職などの挨拶は中国では「通知」と意識され、儀式や会合などでの挨拶は「致詞」「讲话」、歓迎の挨拶は「致欢迎词」と言われる。応対・返事などについての挨拶は「回答」「答礼」と取られる。

（注：赤字は、原文通り、簡体字で入力してあります・・天地シニア）

中国人は内容によってそれぞれ分けていて、個々の事柄として対処し、その事柄に名前が付いている。そして事柄は中国社会の礼儀規範にもとづいて処置されるので、これは礼儀であるという意識が強く、日本人のような相手との和のためという意識はないとは言えないが、日本人ほど強くはない。この意味で中国人は大変礼儀的であり、日本人はたいへん礼儀的且つ実用的といえるのではないだろうか。

これについて中国人と日本人は違うのだと思い知らされたことがある。それは日本人と接触していてよく耳にしたことで、中国人は日本訪問を終えて帰国した後お礼や感謝の気持ちを示さない、つまり、中国人は礼状や感謝状を寄こさないと、日本人が良く非難したことだ。

ところが、中国人に言わせると、もうとっくにお礼を言ってあるし、再々感謝もして礼儀を尽くしてあるのに、なぜ日本人はそういうのであろうかと腑に落ちない。これは全く文化の相違によるものだと思われる。中国では日本とおなじように礼儀を重んじて恩恵を蒙ったら必ず相手にお礼を言い、感謝をするのが規範だ。だから日本訪問時はお礼や感謝はしてあるはずだ。だが、それは訪問時の面と向かって言ったときのお礼や感謝だろう。

それから、中国人にはその場でお礼を言い、感謝をすれば、それでことは済んだという意識が強く、よほど感動・感激しなければ改めてお礼を言い感謝することは少ない。だから中国人は訪問を終えて帰国してからは礼状や感謝状を出すと言う意識がないのだ。しかし日本人には面と向かってのお礼や感謝だけでは足りないという意識があるようで、“改めて”のお礼と感謝の気持ちを相手に求める。

そこで、日本人は「昨日は...」、「先だっては...」と改めてお礼を言い、感謝の気持ちを再び示すようになる。日本人は日本社会のこの規範にもとづいて中国人に帰国後の礼状や感謝状などを期待するわけだが、これがトラブルのもとになり、中国と日本の文化の違いだと思われる。

ちなみに、どれくらいの時間が経ったら改めてのお礼を言わなくてもよいのだろうか、と思うことがある。しかし未だに日本人にまともに聞いたことはない。たぶん個人差が大きいと思うが、一ヶ月経っても言わなくてはいけないと耳にしたことがある。

それから、中国人が大変感動・感謝して再度お礼を言い感謝する場合、「再次表示感謝」と言う。この「再次表示感謝」を日本語に訳すと、「重ねて感謝いたします」か「改めて感謝いたします」となる。どれにするかは場合による。その場での再度であれば「重ねて感謝いたします」であり、日を改めていけば「改めて感謝いたします」となる。この「重ねて」と「改めて」の違いは中国語ではなかなか訳しにくく、強いて訳そうとするのであれば「改めて感謝いたします」は「重新再次感謝」となろうが、実際「重新」と「再次」は同じ意味で繰り返しているのにすぎず中国語としてぎこちない。あるいは「改めて」の意味を説明・解釈するしかない。しかし、これは翻訳ではなくなり、注釈になってしまう。通訳のときに注釈をつけるのはなるべく避けるべきであろう。したがって、これも中国と日本の文化の違いの現れではないだろうか。

もう一つの例を挙げよう。礼の中国への ODA 問題だ。2000 年、日本の一部の国会議員と一部の人たちが、日本が中国にあんなにたくさん援助しているのに中国は感謝していない、実にけしからん、中国への援助額は削減すべきだ、などと騒ぎ立てた。これは援助に対する中国と日本との対処の仕方の違いから起こった問題と思われる。

そもそも中国への ODA 援助は中国が日本に対する戦争賠償を放棄したことへの感謝の印として、日本が中国へ持ち寄ったことから始まったものだ。したがって中国は戦争賠償放棄への見返りとしての意識があり、別に中国に対する格別好意の援助とは強く思わなかったふしがあった。だから感謝する意識は強くなく、逆に当然だという意識が強かったと思われる。しかし、長い間の巨額であるため、感謝の気持ちが全然なかったとは言えないはずで、礼儀として実際は調印式やプロジェクト完成式などの現場では中国側は日本側に向かって感謝の言葉を述べている。ただ、マスメディアによる広報がならず、大衆が良く知らなかったという不足は確かにあった。

しかし、ODA 援助のいきさつを如実に知らせたとしても、中国の大衆はお礼を言う気持ちを持っただろうか。そして国が大衆に感謝するよう呼びかけたとしても、大衆は感謝をしたらだろうか。物事は単純ではない。幾多の歴史認識問題で国民感情を害されている中国大衆の反発は目に見えており、反日感情に油を注ぐに決まっている。だから、この不足にはそれなりの理由があるので、別に日本を侮辱しているわけではないのだ。

日本の騒ぎ立てた人たちの政治的な意図はとりあえず別にして、中国側のこのような苦心と ODA のいきさつを顧みずに、ただ日本の挨拶のしきたりだけから発想して両国関係を言うのではあまりにも思慮が足りないと言わざるを得ない。幸い中国側はこのことに理解を示し、国の指導者は公の場でははっきりと感謝の意を表して、これからは広報などを改善すると約束したので、この騒ぎは落ち着いたようだ。

注意すべきは文化の違いを利用して中日友好関係を損なおうとする下心だ。

満州国を考える（４）

加藤幹雄

二）歴史を辿る

5）日中戦争へ

1937年7月盧溝橋事件。上海占領から南京攻略へ。
色々な和平工作が行われるが駐華ドイツ大使トラウトマンを介した講和が最も実現性が高かったがこれは失敗（分かれ目その4）。ドイツは中国に軍事顧問を送って中国人部隊を訓練し最新鋭の武器で武装。上海では日本軍は勝利したものの苦戦を強いられている。中国と密接に繋がっているトラウトマンの講話に軍部（陸軍）は乗り気だった。

交渉に時間がかかっている間に南京占領。日本側が交渉のハードルを上げたため決裂。近衛首相と廣田井相が強気で臨む。「以後蒋介石を相手にせず。」

日本軍の中国本土からの撤兵は重要な柱だったが、実質上の満洲国の承認や日貨排斥運動の取り締まり等日本には有利な条件も含まれていた。

6) 太平洋戦争へ

日米交渉の失敗（分かれ目その5）

日米諒解案を巡る交渉で近衛首相は妥結寸前まで進んだ。この案はハル国務長官も了解していたと言われる。日本の中国大陸からの撤退が主条件となっていたが、満洲については触れられていなかった。日ソ中立条約を締結して帰国した松岡外相の反対で妥結に至らなかった。松岡は三国同盟にソ連を加えた「四国同盟」でアメリカに対抗することを企図。ハルノートを蹴って日米開戦。

後の研究によれば、ハルノートには明記されていないが日本の満洲領有は暗黙に認めていたとされる。ハルノート初稿には「日本は中国から全面撤退するべし、但し満洲は除く」となっていたという。

満洲は戦争遊興の兵隊基地に。中国と朝鮮での大量徴用工の動員（1944年徴用工動員令）。1940年ハルビンに731部隊の施設が完工。

中国本土への侵攻が無ければこれらの悲劇も防ぐことが出来た。

そして敗戦。

Ⅲ) 何を学ぶか？

何回もあった方向転換の機会が何故実現しなかったのか？

※治安維持法によって反戦戦力が徹底的に弾圧されていたこと。厳しい言論統制により正確な事実が報道されていなかったこと。

※政策を決めるのに関わっていた諸勢力（天皇、政治家、政党、陸軍、海軍、官僚）間の意見集約が進み難いシステム（無責任体制）。1939年9月の天皇談話「どうも全の陸軍には困ったものだ。要するに各国から日本が強いられ、満洲、朝鮮をもとにしてしまわれるまでは到底目覚めないだろう。」一国の統治権の総攬者が、日露戦争以降の歴史をご破算にせずして陸軍の暴走は止まらないだろうと予測するのは驚くべきことだ。

※マスコミと世論の役割も軽視出来ない。マスコミは新聞の購読者を増やすために排外主義と戦争熱を煽る。

※過信と知的驕慢。根強い差別主義。軍事テロの恐怖。

参考1:半藤一利 「昭和史」最終章から、

- 1) 国民的熱狂を作ってはいけない。それに流されてはいけない。
- 2) 最大の危機において日本人は抽象的な観念論を好み具体的な理性的な方法論を全く検討しない。
- 3) 日本型のタコツボ社会における小集団主義の弊害。

- 4) ポツダム宣言の受託が意志の表明でしかなく、終戦はきちんと降状文書で確認しなければならないという国際常識を理解していなかった。
- 5) 何かことが起きた時に対処療法的な、すぐに成果をもとめる短兵急な発想。

参考 2: 粕谷一希 「歴史をどう見るか」 から

戦争責任の最も重い人物は誰か？

昭和天皇、近衛文麿、松岡洋右、石原莞爾（東条英機を入れていない）

結び：

※張学良（1901-2001）の驚き：

西安事件でのことで長く蒋介石により台湾に幽閉されていたが。最晩年に釈放されてハワイで過ごす。その際の NHK の磯村尚徳氏のインタビューに替えて「本当に敗戦後日本人は満洲から居なくなったのか？」

※石原莞爾のその後：

極東軍事裁判の被告にならなかったが、尋問は行われている。最終戦争論を修正。「日本は憲法 9 条を武器として身に寸鉄も帯びず、米ソ間の争いを阻止し最終戦争なしに世界が一つになるように努力し、大アジア主義の観点から中国と組んで東亜的確立に注力すべきである。」1949 年 8 月没。享年 60 歳。

参考文献：

山室信一 「キメラー満州国の肖像」（中公新書）

加藤陽子 「満州事変から日中戦争へ」（岩波新書）

朝日新聞は 3 月 7 日に「識者が選ぶ平成の 30 冊」を掲載しているが、「キメラ」と半藤の「昭和史」も選ばれている。

「静聴雨読庵より」（7）

尾関陽四

ホー・チ・ミン市でシベリウスを聴く

暇ができたので、ベトナムのホー・チ・ミン市（注 I）に遊びに行った。目的は特になく、本当の休暇だ。ベトナムは私の敬愛する国の一つで、あのベトナム戦争を戦い抜いて、アメリカを屈服させた国を一度は訪れたいと思っていた。気温は 30.0 を超えることはなく、思ったほど暑気はこたえなかった。

（I）銘板を作る

私の宿泊していたホテルの近くの通りに、何軒か銘板制作を掲げる店舗がある。「Broadway St. J」とか「Saigon Building」とかのネームをステンレスかアルミの銘板に掘る、というか、浮き上がらせるものを受注ベースで扱っている。

最初の店を覗いてみた。「日本語のこういう銘板はできますか？」

店員はしばらく考えていた後、パソコンの前で、手書きの文字をペイントすればできる、という。私がペイントしてみると、手がぶれてしまい、文字が様にならない。あきらめて店を出た。

次の店で同じ質問をしてみると、店員はやはりしばらく考えた後、

「あなた、英語ができるか？」

とスマートフォンで英語の筆談を始めた。私は口頭で「できる」と答える。

「これは、中国語か？」

私が持ち込んだ銘板の文字案は「静聴雨読庵」。

「いや、日本語だ。英語の意味を付けておこづか？」

「お願いします」

「Quiet Listening Rainy Reading Lodge」

「わかった。何とかやってみよう」

職人とのやりとりはこれで終わり、次いで、営業とのやりとりだ。銘板の大きさ、デザインなどを決め、価格提示があった。「50万!」（営業のおばさんはベトナム語と英語のチャンポンで話す）、一瞬驚いた。何がなんでも高すぎないか？

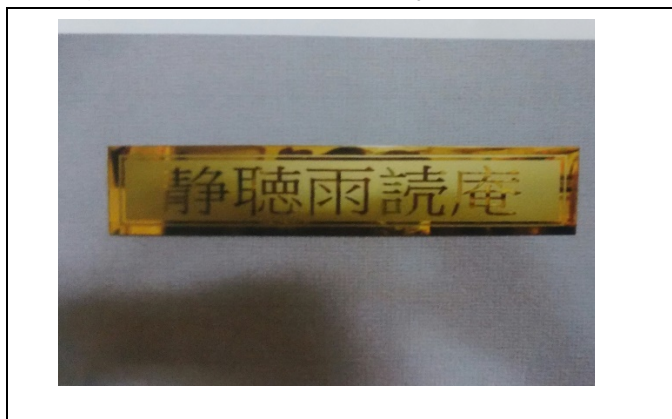
しかし、よく考えれば、「50万ドン」ではないのか？ ドンを円に換算するには、0を2つ取り、さらに2で割ればよい。（ベトナムで早くデノミが実施されることを祈る）

「2500円か。OK」 商談成立だ。

「では、明後日の午後に来てちょうだい」

「よろしく」

2日後、お店に足を運ぶ。すると、営業のおばさんが「出来てるわよ!」と言って、銘板を私に見せた。



立派な仕上がりだ。（光の反射で写真映りが悪い）

一番気になったことを聞いた。

「どうやって、この文字を探し出したの？」

これについては、言葉が通じず、事情を聞くことはできなかった。以下は私の推測だ。

職人は、まず、英語の情報をもとに、似た文字を、英語—中国語翻訳アプリで探す。似た文字が見つければ、私の提示した日本語の文字と照合する。それと合致すれば、OK。同じ操作を5文字分繰り返して、「静聴雨読庵」の文字列を完成させる。後は、飾りのついた銘板データに文字列を埋め込んで、ス

テンレスに焼き付ければ完了。

出来上がった文字列は、明朝体だが、「雨」の文字だけが気になる。そう、中心部が、「求」のようになっている。日本語であれば、点が2つずつ並んでいるはずだ。それで、職人がこの文字を中国語の書体から引いてきたと推測したわけだ。中国語に詳しい私の友人は、「その通り」という。

私はベトナム語をまったく知らず、お店の人は日本語をまったく知らないという状況の中で、ベトナム語—英語—中国語—日本語を介する複雑な取引だったが、何と・かなるものだ。わずかな経験だったが、ベトナム人の聡明さに感じ入った。わからないことにも真摯に挑戦して、商売に結び付ける。店のおばさんの陽気さもこの街の一つの風物だ。今、この銘板は、わが家の「静聴両説庵」の壁を飾っている。

(2) プラスティックの腰掛とオートバイ

ホー・チ・ミン市の街中では守衛の姿が目立つ。大きなビル、銀行、アパートメントだけでなく、商店にも軒並み守衛がついている。「ついている」と表現したのは、必ずしも「立っている」のではなく「座っている」守衛も多いのだ。座っているのは日本の銭湯などで見かけるのと似た「プラスティックの腰掛」だ。この腰掛が路地の至るところに置いてある。守衛は、日長一日、自分の店の前の腰掛に座って過ごしている。その役割は、一般的な守衛の役割の範囲なのか、そうでないのかは、よくわからない。

この腰掛は座るためのものであるが、ある時には食卓になり、近くの屋台の食堂から取り寄せたフオーやコムなどをこの上に置いて食べる。また、ある時にはトランプなどのカード・ゲームの場となる。

このように書くと、ホー・チ・ミン市の人々は怠け者のように聞えるが、決してそうではない。実際、同じ持ち場で一日中過ごすのは大変なことで、その労力を和らげる道具としてプラスティックの腰掛は必須のアイテムなのだ。

もう一つ、ホー・チ・ミン市の街中で目立つのが、いわずと知れた「オートバイ」だ。街を南北に・東西に駆け回るオートバイには目を見張る。老若男女、誰もが乗っている。中には二人乗りも見受ける。車や他のオートバイの間隙を縫って少しでも前に出たがるものが多い。時には歩道にも乗り上げる。まったくもってその勢いは凄まじい。

ホー・チ・ミン市は大都会にしては道路信号が少ない。そこでオートバイの洪水の中を歩行者はどのようにして道路を横断するのか?それが問題だ。

第一の方法は信号のある横断歩道を見つけること。

第二の方法は、車やオートバイの列にわずかに隙間が出来たら進むこと。

それでも、オートバイが向かってくることがあるが、故意に人を援ねようという人はいないから、こちらが手で制して渡れば、オートバイは避けてくれる。

ある街角のカフェで道路を見ていた。引っ込み線があり、そこにオートバイが5台停まっていた。近くのビルから出てきたOLがドライバーから小さな荷物を受け取り帰っていく。そう、これは、宅配の「ラスト1マイル」を担う個人宅配サービスのオートバイらしい。荷物は小物が多い。後輪に振り分

けのようにして荷物袋を下げている。中国で盛んなことは知っていたが、ホー・チ・ミン市でもこの個人宅配サービスが盛んなことがわかった

オートバイの用途はさらにある。食堂の屋台にもなるのだ。やはり後輪の振り分けの袋に食材を詰め込んで、街角で店開きする。これは街のあちこちで見かける風景だ。

タイのバンコクで見かけるのと同じように、路地を走る短距離バイクタクシーとしてもオートバイが活躍している。女性が気軽に後席に跨いで出発していく。

プラスチックの腰掛とオートバイがホー・チ・ミン市民の日常生活の中心にあることを観光客の私は実感した。

(3) シベリウスの演奏会

ホー・チ・ミン市の繁華街ドンコイ通りのはずれに、市民劇場がある。ガイドブックによると、1898年のフランス統治時代に建造されたもので、普段は観光客向けのベトナム伝統サーカスの常打ち小屋になっている。月に2回ほど、クラシック音楽、オペラ・オペレッタ、バレエなどの公演が行われている。私の訪れた時は、シベリウス（注2）の作品の演奏会がかかっていた。曲目は『ヴァイオリン協奏曲』と『交響曲第2番』。意欲的なプログラムだ。

オーケストラはサイゴン放送管弦楽団。舞台上に並んだオーケストラを見て面白いと思った。第1ヴァイオリンの列が3列しかないのだ。日本のサントリー・ホールや東京芸術劇場の場合、第1ヴァイオリンが6列並ぶ。それだけ舞台の間口が広いのだが、ここでは、間口が狭いので3列。さらに面白いことに、第1列は2名の奏者が座るが、第2列と第3列は3名の奏者が並ぶ光景が目に入った。3名が1つの譜面台を共有する。ホールはそれほど大きくない。客席は800名ほどの収容能力かもしれない。

オーケストラの団員の年齢は若い。ヴァイオリンのソリストだけは50歳代か60歳代の大ベテラン。シベリウスの『ヴァイオリン協奏曲』は、第1楽章が大作で、演奏に20分ほどかかる。これを演じきったソリストは大きなジェスチャーで聴衆に訴える。それに応えて、聴衆が一斉に拍手する。まだ第1楽章が終了しただけなのに。ソリストの思い入れたっぷりのジェスチャーには違和感を覚えた。なお、楽章が終わる毎に拍手する習慣がこの地にはあるらしく、『交響曲第2番』の演奏でも同じことが起こった。

『交響曲第2番』では弦楽器がしっかり流れていて好感を持てた。できれば、リズムを正しく刻み、アップテンポの演奏を心がけ、フレーズの切り換えでは思い切った転換を試みるなどを修練すれば、素晴らしい管弦楽団になっていくだろう。情緒たっぴりなウーン・フィルハーモニーよりも日本の管弦楽団の正確な演奏を追いかけたらいいと思った。五嶋龍を連れてきて、そのキレの良い演奏を聴かせたら、団員はびっくりするだろう。

ホールの埋まり具合は6割ほど。聴衆が一度拍手すると、カーテン・コー

ルを待たずに拍手が引っ込んでしまう。ここらあたりは、クラシック音楽の受容成熟度が低いと感じた。

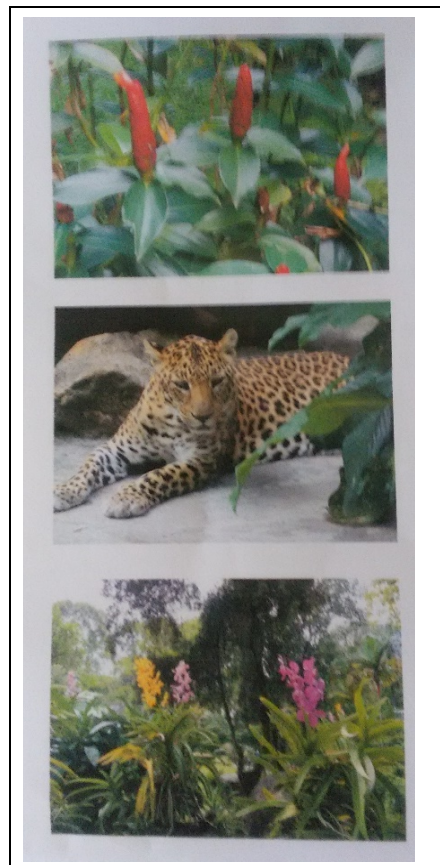
次の演奏会の曲目は、チャイコフスキー『ピアノ協奏曲第Ⅰ番』とショスタコーヴィチ『交響曲第5番「革命」』。大曲ばかりの選択に、頑張ってほしいとエールを送った。

(4) 動・植物園にて

どこの街に行っても、動物園や植物園では心が和む。ドンコイ通りからレタントン通りを北上すると、動・植物園にぶつかる。動物園と植物園が一緒になった施設のようなのだ。隣接する幼稚園から幼児の声がこだまする。空気が突然さわやかになったようだ。

(回想、：上海市の南西部に植物園があった。どのようにアプローチしたか覚えていない。着いて驚いたことに、植物園の木々や植栽の葉がすべて灰色の塵に覆われていて、どこにも緑が見られない。緑のない植物園とは！

これは最悪の植物園だった。20年ほど前だったのであろうか、当時の上海は、経済成長の最中で、環境に配慮する余裕を持ってない時代だったのであろう。そういえば、上海市内全般に植物が極端に少なかった印象がある。今はどうか?)



翻って、ホー・チ・ミン市の動・植物園は、しっとりと落ち着いた雰囲気を保っている。南国特有の湿った空気と、原色の植物が絡み合い、動・植物の楽園を演出している。

海外での思い出 (2)

森永善彦

アテネ (2)

先回に続き私のトヨタでの海外勤務時代の話の続きを致します。先回はアテネに出張で行った時のアテネ到着時の話をしました。その続きです。

さて日中はトヨタのギリシャの代理店に行き業務打合せをし、終わるとホテルに送って貰いました。

業務打合せは朝7時から昼の3時まで昼食抜きで行いました。

その頃のアテネではこれが一般的な勤務形態の様でした。

私はそんな事は知らないの、昼頃になってそろそろ食事に出掛けるのかな

一と言う素振りをしていた様で、私の仕事相手の部品部長が「ひょっとして空腹なのか？」と言ったので素直に「少々空腹である」と返事をしました。そう言うのと暫くして雑用係の少年がサンドウィッチとオレンジジュースをお盆にのせて持って来てくれました。

しかし打合せを中断することなく、私だけサンドウィッチを食ベジュースを飲みながら業務打合せを午後 3 時まで続けました。

3 時になると今日の仕事はこれで終わりであると言って、英語が話せる部品部長の補佐役が私をホテルに送ってくれました。

(部品部長は英語が全く話せないので補佐役が通訳をしてくれました)

なお付け加えると、車のアテネ中心部への乗り入れ規制をしても、街の中は車が溢れていて、ホテルと代理店の間の移動は往復とも渋滞の中結構時間が掛かりました。

ホテルについて夜の食事の約束をする事になりました。

相手が今晚は何時に迎えに来ようかと聞くので、雰囲気として余り早い時間はアテネの流儀ではなさそうに感じて、遠慮がちに 8 時ではどうかと言いました。

それでも相手が少し困惑した様子で 8 時は早すぎると言うので、それでは 9 時に来てくれと頼みました。

実際にはアテネの大半のレストランは夜 10 時スタートです。9 時でも早すぎたようです。

暫くホテルのバーで時間を過ごしてレストランに出掛けました。

その時は確かギリシャ料理(肉、魚)のレストランに行って 1 時頃ホテルに帰って来たと思います。

ギリシャの料理はフランス料理の様にやたらソースを使ってこってりしているのと違い、魚料理も日本人の口に合う食べやすいものでした。

160 年前の日本社会に驚愕・感心・感動した欧米人 (2)

臺 一郎

その 2. 喜望峰以東でもっとも優れた民族

ペリーの浦賀来航に先立つこと 5 年前の 1848 年、一人のカナダ生まれの捕鯨船員が単身小舟で北海道の利尻島に上陸した。彼ラナルド・マクドナルドは、不法入国者として松前藩に拘束され取り調べを受けたのち、長崎に移送された。その後約 6 か月間にわたり彼は長崎奉行所属の若手通詞 14 名に英語を教えたが、翌 1849 年に出島のオランダ商館経由で米国船に引き渡され帰国した。彼は帰国後に書いた回想録の中で、自分が教えた 14 名の通詞について『彼らは驚くほど英語が上達した。(途中略) 彼らの頭は並外れて鋭敏であり、かつて私は自分の頭の良さにうぬぼれて「目から鼻に抜けるほどだ」と自負していたが、その私をはるかに凌駕するほどであった。彼らは私の知る限り、生来もっとも賢い国民だといいたい』と絶賛した。

そして 1853 年、外輪型汽帆船を含む 4 隻の軍艦を率いて突如浦賀に現れた米国海軍の提督マシュー・ペリーは、帰国後にまとめた日本遠征記の中で、日本人のモノづくりや工業に対する並々ならぬ潜在能力に感心するとともに

に、『日本は、外国との交流を禁止している排他的な政策（鎖国のこと）が緩められたならば、すぐに最も恵まれた国の水準にまで達するであろう。文明世界の技能を手に入れたなら、日本は将来きっと機械工業の成功を目指す強力な競争国となろう』と後世のモノ造り大国への発展を予測した。そして歴史はほぼペリーの予測した通りとなった。

また 1856 年に来日して初代の米国領事となり、その後初代の米国公使となったタウンゼント・ハリスは、日本人を『喜望峰以東でもっとも優れた民族』と称えるとともに、『日本国民に、その器用さと勤勉さを行行使することを許しさえするならば、日本国は遠からずして偉大な、そして強力な国家となるであろう』と記述した。

初代英国公使のラザフォード・オールコックも、日本での滞在記「大君の都」の中で、日本の社会及び日本人の国民性について、『非常に多くの（仏教の）宗派が協調し合って共存していること、及びイギリス本国（大ブリテン、アイルランド）ほど大きくはなく、しかもそれと大体同じような地理的位置にある一群の島々に住んでいる約 3000 万人の国民が飢えと欠乏をほとんど知らぬという事実』に驚嘆し、『日本人は、地球上の三大地方に住んでいるすべての国民のうち第一級に属し、ヨーロッパ人と比較されるに値する国民である』と評価した。

商才に富んだ英国帆船トロアス号の船長で、1859 年から数回にわたり日本を訪れたヘンリー・ホームズはその見聞記の中で、日本人の印象が予想とは全く違って『高度の文明を持つ、気のきいた精力的な民族であり、かつ自らの強さと能力を十分に信じている驚くべき人々であることを悟った』と書いている。また、英国の高名な女性旅行家で 1878 年（明治 9 年）に来日し、欧米の女性としては初めて陸路で東北地方を旅行したイザベラ・バードは、帰国後にまとめた日本紀行の中で、『日本は、非常に古いものと精緻な文明とを持つ偉大な帝国で、珍しいものがそこかしこにあり、まるでよその星に来ているようです』との印象を書いた。

ちょっと誉めすぎではと思うほどに日本や日本人のことを絶賛したのは、英国の詩人エドウィン・アーノルド卿だ。彼は東京で行われた歓迎晩餐会での挨拶で『日本は地上で天国あるいは極楽に最も近づいている国である。その景色は妖精のように優美で、その美術は絶妙であり、その神のように優しい（国民の）性質はさらに美しく、その魅力的な態度、その礼儀正しさは、謙虚ではあるが卑屈に墮することなく、精巧ではあるが飾ることもない。これこそ日本を、人生を生き甲斐あらしめるほとんどすべてのことにおいて、あらゆる他国より一段と高い地位に置くものである』と絶賛した。

文化講座・講演会

奈良興寺文化講座 2019年7月18日（木曜日）

午後 5 時半～6 時半：第一講

「東南アジアの仏教」

興福寺執事

辻 明俊

午後 6 時 40 分～7 時・・・心を静める

午後 7 時～ 8 時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」 興福寺 貫首 多川俊映

会場：(学) 文化学園 文化服装学院内

受講料：500 円 先着 200 名

(JR 新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から 8 分、都営新宿線新宿駅 3 分)

第 108 回 新三木会 講演会のご案内

1. 日時 7 月 18 日 (木) 13 時～ オリオンルーム
2. 講師 森信茂樹氏 中央大学大学院教授 東京財団上席研究員
3. 演題 『日本の財政危機と税制—消費税の基本』
4. 申込 Eメール：shinsanmokukai@gmail.com
電話：070-6994-0137 フルネーム・卒年・所属 (紹介者) 記入。

天地シニアネットワークで申し込んでください

5. 会費 一般 2 千円, 婦人千円、学生 (院生) 無料, 茶話会ありません
6. ホームページ <http://jfn.josuikai.net/ircle/shinsanmokukai/>
7. 今後の予定

- 第 109 回 8 月 15 日 (木) 『昭和史から学ぶ教訓』
保阪正康氏 日本近代史・歴史家・ノンフィクション作家
- 第 110 回 9 月 19 日 (木) 『揺れ動く朝鮮半島情勢』
平井久志氏 ジャーナリスト 元共同通信社ソウル支局長
- 第 111 回 10 月 17 日 (木) 『ブラックホール撮影、宇宙の話』未定
村山 斉氏 素粒子物理学 素粒子物理学者 カブリ財団会長

事務局

<投稿>を歓迎します。

<プリント版・郵送>

メール版を編集してプリント版を月に 1 回発行郵送しています。

お申込みくださればお送りします。一応、実費として月 @ 350 円 (4200 円/年) をいただいておりますが、強制するものではありません。

<振込先> 三井住友銀行「神田支店」 (普通) 7871532
(口座名) テンチシニアネットワーク

天地シニアネットワーク・テーブル・495号

発行：2019年6月16日

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

〒116-0001 荒川区町屋 3-2-1

ライオンズプラザ町屋 703

メールアドレス：tentisenior06@gmail.com

電話・FAX・03-3819-7651